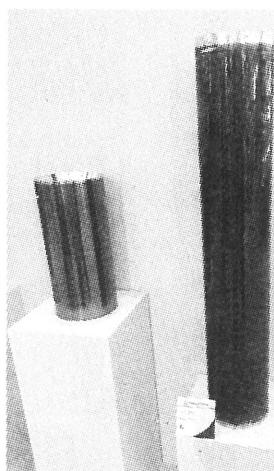


複写機やプリンターに使われる感光体の生産量が大幅に減少している。新型コロナウイルスの影響に加え、先進国でのテレワーク定着、感光体寿命の伸長もあり、コロナ禍以前の2019年レベルに戻ることは難しそうだ。調査会社のデータ・サプライがこのほど刊行した「2021年版感光体マーケット総覧」(東京都台東区、山本幸男社長)によれば、20年の全世界の感光体生産量は前年比10.3%減の3億3791万本となつた。21年以降も減り続け、24年には3億2351万本にまで減少する見通し。感光体は管状の部材で下

コロナ禍からの回復困難



中国メーカーの感光体
(データ・サプライ提供)

先端部材 モビリティ

20年生産量10%減

中国は地場メーカー台頭

データ・サプライ調べと傷が生じるため、定期的な交換が必要となる。従来は直径6センチの感光体が多く、3センチの感光体が増えている。その一方で、樹脂部材の使用量が減ったことを理由に値下げ圧力が高まり、材料メーカーは収益面で厳しい状況に立たされている。

中国は地場メーカー台頭

このような状況を背景に、感光体市場は完全な減少フェーズに入っている。日本メーカーのみならず、これまで右肩上がりの増加を続けてきた中国のサードパーティメーカーも頭打ちの傾向が顕著になつてきたり。複写機感光体でもロングライフ化の傾向が進展しており、交換頻度の減少につながつていて。全体需要が減少するなかで、今後はハードメーカーによる事業戦略の見直しが進む。事業の売却などを見据えた動きもあるほか、感光体についても外注製品へ切り替えることで投資・開発コストを削減する動きも

北米の既存メーカーにとって中国での競争激化につながつており、厳しい状況が続く。

複写機およびプリンターの、利益面での減少幅は想定よりも小さいとされる。感光体は消耗品のため、出荷ではなく設置にリンクしている。(山本社長)これが理由だ。例えば複写機では5年リースが通常で、景気が悪くなるほど「5年間目いっぱい使う(同)」とさりげなく画像を描いたり消したりする。使用回数が増えると、中国にも複数のサードパーティメーカーが存在する。一方、中国でも複数のサードパーティメーカーが存在する。

成熟しつつある事務機市場において数少ない成長市場である中国では、プリンターカーの動きが進展しており、地場メーカーの急拡大が続いている。日本や

ただ需要の頭打ちになると、これ以上の技術革新が難しいという課題は残存します。これまでの成長戦略を維持していくため、中国の新興メーカーによる勢力図の置き換えなど、今後の動向を注視する必要がある。